

ビーズ生産者訪問記

2005.1

津波のニュースがまだ世界を駆け巡っていた年明け1月6日～13日、インドのTARAプロジェクトのビーズ生産者を訪ねてきました。

ビーズ業界のビッグニュース

デリーにあるTARAに到着してまず耳に飛び込んで来たのはビーズ業界でのスキャンダルでした。インドではバナラス・ビーズという商社がほぼ独占的にビーズの輸出入を行っています。小さな生産者たちは仲買人を通してバナラスビーズに卸すのが一般的です。ところが、そのビーズの代金が何百万円も踏み倒されたというのです。これはインドの農村の物価水準では大変な額です。材料費や何日分もの労働の対価が支払われなかった生産者の苦労は想像するに余りあります。バナラスビーズ側にどういう事情があったにしろ、しわ寄せを一番貧しい生産者に与えるということに憤りを覚えました。

手工芸品の世界ではともするとフェアトレード品と通常の流通品との違いがわかりにくいことがありますが、こういう事例に接するとやはり一般ビジネスとフェアトレードの流儀には本質的な違いがあることを再認識します。

TARAのスタッフはあいかわらず忙しく仕事に追われていました。新しくインドのフェアトレード・フォーラムの事務所も引き受けたほか、政府主催のワークショップに協力したり、植林や教育などの社会活動も拡大しているようでした。収益につながらない活動にも力を惜しまない彼らの姿勢にはいつも頭が下がります。

ワークショップ

さて、今回の生産者訪問の理由は、新しいビーズのサンプルを作ることでした。ビーズのデザインも、最初の頃はインド独得のエキゾチックな配色やデザインが珍しがられましたが、今はやはり日本人の好みにあったものでないと売れなくなっています。そんなわけでこちらでデザインをして色を指定して作ってもらうということをやってきたのですが、指定した色と全然違うなど決まらずにうまくいっていませんでした。

生産者をたずねてみてその理由の一端がわかりました。以前ビーズを作っていたグループは、コーディネーターが飲酒の問題を抱えていたりしてうまく機能しておらず、TARAはもっとやる気のあるグループにチャンスを与えることを決めたようです。新しいグループはイスラム教徒がコーディネーターとなっていて、以前より若干教育も受けて前向きな職人さんたちのようでした。最低の環境で生きて来たひとたちを助けることができなかつたのは残念ですが、本人たちにその気がなければどうしようもなく、TARAの決断は十分理解ができるものでした。しかし、わたしの作った色見本は以前のグループが持っているため、新しいグループは色番号の意味が分からないまま作っていたのです。そこで、もう一度色見本を配って、デザイン画にしたがってビーズを作ってもらいました。

一緒に作っていると、日本ではわからなかった事情がいろいろとわかりました。まず、ガラスの色は買うたびに変わるので全く同じ色のビーズを二度と作ることができないこと、型を利用してあるので正確な大きさにはできないこと、などなど。また一色に

つき5kg単位のガラスを買わなければならないため、こちらのデザインの仕方にも工夫が要ることもわかりました。

しかし、ひとつひとつ話し合いながら作ったサンプルビーズはかなり良い出来上がりになっていました。仕上がったものについては注文をしましたが、日本に入荷するのはまだ少し先になりそうです。

今回はやらなければならないことが盛りだくさんだったため写真撮っている余裕がなくお見せすることができないのが残念ですが、ワークショップに参加してくれた職人さんたちは6人、ほとんど20代の若者でした。中には24歳にしてすでに10年選手という人もいました。だいたいが小学校を途中まで行ったという感じでしたが、中には高校まで進んだ人もいました。彼らにとってビーズ作りが良い仕事となって、今後も村に残って技術を継承していつてくれることを願います。

危険な生産地域

ところで、ビーズ生産者を訪問するのはもう何度目かになりますが、さまざまな理由から生産者はわたしにとってまだまだ遠い存在です。生産地は地理的にはTARAプロジェクトのある首都デリーから東南へ200kmほど行ったあたりにあります。電車の利用があまりにも不便なため車で行くのですが、国道を飛ばして5時間ほどかかります。TARAの職員や生産者はバスを使うのですが、それだと6時間かかってしまうそうです。現地で宿泊は不可能なため往復10時間かけての日帰りとなります。さらにこの一帯は非常に治安が悪く日が暮れて暗くなると盗賊が出没するので、急いで用をすませて帰ってこなければなりません。まさにトンボ返りです。

当初、この地域がどんなに治安が悪いか聞かされてもなかなかイメージが湧かなかったのですが、今回プーラン・デヴィの出身地と聞いて大いに納得し、またゾッとしました。プーラン・デヴィというのはアンタッチャブル（カーストのさらに下に位置づけられる一番身分の低い人たち。穢れるので触ってはいけないという意味）として生まれて女盗賊になり、後に国会議員になるも暗殺されるという波乱の人生を送った女性です。わたしは何年前に彼女の自伝「女盗賊プーラン」（プーランドヴィ著、草思社）を読んで、あまりの陰惨な内容に気持ち悪くなった覚えがあります。アンタッチャブルとして村に生まれた男性は殺されても誰も気にかげず、女性はレイプされても文句を言うこともできない。インド社会の闇の深さはわたしの想像を遥かに超えていました。

しかし、まさかそんな地域に自分が出入りしていたとは。プーランの時代と現在では多少状況は違っているのですが、ビーズ生産者を取り巻く環境の厳しさを思いました。彼らもまた多くがアンタッチャブルです。これまで、彼らに「質の良いビーズを作れば高く売れて生活もよくなる」ということを何度言っても理解してもらえないのが不思議だったのですが、彼らの生きて来た環境がこれほど無法なものだったとしたら、外国人の言うことを信じて向上心を持ったりしないのはむしろ当然かもしれません。彼らと自分の生きる環境の隔たりの大きさに戸惑うと同時に、彼らと関わることになった巡り合わせの数奇さも思わずにいられません。

美しいビーズの裏にはまだまだストーリーがありそうです。お客様各位には、こうした生産者の事情も含めてビーズを愛用してくださると嬉しく思います。 (文・早苗 康子)